マスコミのなかの千春

このごろの松山千春はどこかの新聞や週刊誌にとりあげられることが多くなってきました。

足寄の実家へわざわざ取材にこられた週刊「女性自身」などは、家族全部の写真をとらえるし、二階の千春の部屋へもカメラが入りました。が、東京の発行所からの電話があって、はじめグラビア四頁の予定が六頁になったので、北海道での発売は四月一日になったとの連絡がありました。

千春が不在のときにこられた月刊「さっぽろタウン情報」では、千春友人や高校時代の担任だった先生などを訪ねて取材しましたが、これは三月二十五日発行とのことです。

こちらの知らないうちに東京やその他での本人取材で発行されて読者の方々から知らされて、はじめて気がつく雑誌もあることで、たとえば三月七日発行の「プレイボウイ」には「北海道のジュリー松山千春」の見出しで

唄う人間がみんなピンクレデーになっちまったら文化が存在しなくなるぜ

ジュリーの力は認めるよでも、人をあだけ酔わせることができるのに、なんで自分の主張をしないんだよ、オレの唄には全部に主張が入っているんだ

オレの敵は人間じゃない北海道に吹き荒ぶブリザードだよ、東京はひとつのローカルさ

『そもそも足寄のスーパースターとしてデビューしたが、足寄と北海道の中でも屈指の田舎、彼の生れた故郷である……「東京だと敵は人間ですよ、ここは違うんですよね、敵は自然なわけ、これが人間の意のままにならないものです、そんな中で育ったから人間同志がいがみあうなんてのはちっぱけに思えてくるわけさ」北海道での彼の人気はジュリーどころではない、彼が出演する整理券を求めてマイナス二〇℃の夜、女たちが坐り込む始末で、放っておけば確実に凍死だ、で彼はその番組からおりることになった、シングル盤「時のいたずら」はもちろん北海道のレコード売り上げのすべての記録を塗り変えている、「人を酔わすのはすごいことだと思うな、ジュリーにしろピンク・レディーにしろそこらへんは認めるよ、でもオレはオレのやり方で酔わせたいんだ、オレの主張でね」ジュリーにしろピンクレディーにしろ北海道では手の届かない遠い存在だ松山千春の誕生はそんな道産子たちが懐に入り込むことが出来る北海道の肌触りを持ったアイドルなのだろう、「いつまでもオレは北海道で唄い続けますよ、東京はオレにとってひとつのローカルさ」コート無し下着無しで歩いて行く、「慣れてるからね」なんだそうだ、見せかけのアイドルとは根性が違うオレは北海道のアイドルさと言いたげだった」と書いて五枚の写真を載せています。

また、三月二日付の「週刊文春」には「北と南のスーパースター」と題して

いま東京へ、そして全国へと快進撃を始めている

かたや北海道のフォーク松山千春、かたや沖縄の民謡ロック歌手喜納昌吉北と南の違いこそあれ、二人とも強い個性を売りモノにしてすでに地元では圧倒的人気を得ている土地っ子シンガーたちだ

この二人、近ごろマンネリ気味の歌謡界に新風をふきこむ救世主となりそうな気配である

「お前ら！」「チハル！」舞台と観客のやりとりが、なんともいえない親近感を生んで、北海道の女学生のアイドルになっているのが松山千春、十勝平野の北、足寄町生れ、高校卒業後、なんの気なしに出たフォークソング大会で認められたのがこの道、入るキッカケとなった、北海道なまりまるだしの快活な語りと恋の唄がウケにウケ、コンサートでは失神する者が出る始末、今、札幌で一本、東京で一本、深夜放送のDJをしているが、東京に住むつもりはないという二十二才と、四枚の写真をそえて掲載しています。

さらにフォーク専門誌の「ガッツ」二月号にも「北海道で絶大な人気をさらう松山千春」として

シングル「時のいたずら」の大ヒットで、全国的に名を広めた…道内一の人気を誇っている、目つきが鋭くて精かんな表情がたくましい…細身だがバスケット、野球、スキー、スケートとスポーツは万能なだけに、引き締まった体つきをしている

一月二十六日に訪れた函館は、数日前の雪が土の上をおおっていた、暑さには弱いが、寒さには自信がある、上は薄手のTシャツに皮ジャンだけといういでたちで、街をかつ歩する、夜は市民会館でコンサート、通路の階段まで人が埋まっていた

「チハルーつ、こっちを向いて！」「チハルーつスーツかっこいいわよ」

「チハル」の叫び声が飛び交う、手振りもおかしくジョークを盛り込んだおしゃべり、客席との応答がつづく、ギターの弾き語りのあと、二部では胸を押えながら切なく歌った歌は、「私を見つめて」（LPこんな夜は―）

と述べています。

なお、「週刊FM」による全国ヒット五十曲のうち千春のLP「こんな夜は」は、松崎しげる、吉田拓郎山口百恵、小椋佳などを抜いて二十二位にランクされていることで（二月二十七日調査）このうち外人歌手を除けば十三位となります

こんなことから千春はイヤでもマスコミのなかへ登場させられざるを得ない状態となってきました。

読者の室

始つて、初めて彼についてくわしい事がわかりました

私のまだ行った事のない北海道を、歌で教えてくれたのは、千春だと思います

多分北海道の大地は、私の頭の中でえがいているものより、何十倍も広いでしょう。

けれどもそこまで教えてくれた人は、千春以外にはいませんでした。

ビルと車で、人間の住む場所が失なわれていく東京で、せめて千春の歌を聞いて深呼吸したいのです。

ですから千春が東京でまた、各地でコンサート開くことに対して、冷たい目で見ないでほしいのです。

北海道の千春ファンの方々、初めまして。

私は東京に住み、千春が大好きな女の子です。

皆さんの多くの人が、千春に東京へ出て来てほしくないと、思われていることでしょう。

それには私も賛成です。

けれども、昨年の夏から千春の事を知っていた私はフォーク雑誌の片すみにのる、千春の情報が唯一の便りでした。

東京から、遠い北海道のスターを蒸うのは、楽ではありませんでした。

オールナイトニッポンが、ずっと見つめてきたから、歌えるんです。

私は、千春さんのファンじゃありません。

ラジオから流れる、千春さんの言葉すべてに、納得してるような、そんな都合のいいファンじゃありませんでした。

千春さんの歌を暗気してけんでいるような、ファンじゃありません。

ただ彼の歌がとつても好きで、釧路でのコンサートも、釧路には来てくれませんでした。

春に、全国従断コンサートがありますね。

道内も、十五カ所まわると聞いてます。

釧路にも来てくれることを祈つてます。

（釧路のT・Aさん）

☆　☆

私は、松山千春さんの歌が、とても好きです。

私今、中学三年生です。

春には、卒業です。

千春さんの歌で、〝とうさん〟ていうのがあります。

（釧路のT・Sさん）

☆　☆

千春さんに、とても感謝しています。

そしてそれにもまして、千春さんのお父さんには、感謝しています。

千春さんは、足寄にお父さんがいるから、歌っていられるんです。

お父さんの生きざまを、いつも強い唄作つて、また来ます。

だから待つていて下さい「

私……ずっと信じて待つていました。

バースデイーコンサートも、今年もよろしくコンサートも、釧路には来てくれませんでした。

春に、全国従断コンサートがありますね。

道内も、十五カ所まわるなあ、人間として最高の生き方をした人だよ、息子がどんなに立派になつたって、手放しでよろこぶんじやなくて、ただじつと見守つているような人だよ。」

と、つけ加えました。

私も、あたつている様な気がします。

私は、二つ年上の兄がいます。

昨年の秋に、高校を二年で中退しで、出て行きました。

ひろといいます。

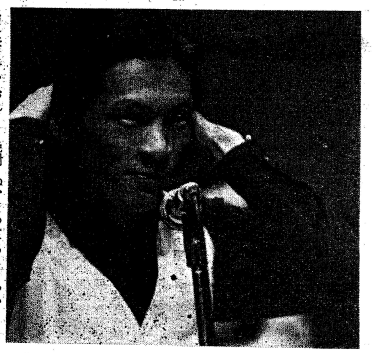
今は、どこにいるのかさえわかりません。

父は最後に、こう言いました。

「できればひろに、いまの歌をうたつてもらいたかつたな……」

私、なんにも言えませんでした。

一生懸命に育てた息子



○…父からみた千春の場合は、なにしろ四十才もの年令差があるので、ふつうなら孫みたいなあいだがらです。

○…生れて間もなく大病にかかり、北大病院に一年近く入院して、無事に帰つてきてからは父さん子で夜は父の添い寝で、毎晩のおとぎばなしで自然に寝つく習慣となつて、こちらもお話しの創作に追われたものです。

○…新聞記者らしくない新聞記者をめざしてきた父に対して、千春も芸能人らしくない芸能人であつてほしいものとねがつているのですが。

○…幸いに、いまのところマスコミの千春のとりあげぶりも、単にヤングのアイドルではなく、ひとつの根性のある男として紹介してくれているので、本人もそれに応えて成長すること。

私もこの春卒業と同時に、家を出て病院に住みこんで看護婦になります。

高校へ進学したかつたけど、私も結局は兄と同じに父をきらつて、家を出るのです。

親孝行なんて、なんにもできなかつた。

でもたつた一つだけ、千春さんの歌を聞かせてやれたことが、すくいの様な気がします。

（釧路のT・Aさん）

主筆の室

○…病院治療代の支払いは千春が小学校へ入るころまでかかつたもので、そのことはなにも千春にわからない筈なのに、家が貧乏ぐらしであることは認識していて、千春のLP「こんな夜は」は、松崎しげる、吉田拓郎山口百恵、小椋佳などを抜いて二十二位にランクされていることで（二月二十七日調査）このうち外人歌手を除けば十三位となります

こんなことから千春はイヤでもマスコミのなかへ登場させられざるを得ない状態となつてきました。

○…家業は小さいながらも新聞社なので要領よく世渡りすればよいのに、正義のためには貧乏ぐらしに耐えても妥協しないで、ひとりで取材して活字をひろつて印刷している機械の音で育つた形の千春だつたわけです。

○…新聞記者らしくない新聞記者をめざしてきた父に対して、千春も芸能人らしくない芸能人であつてほしいものとねがつているのですが。

○…幸いに、いまのところマスコミの千春のとりあげぶりも、単にヤングのアイドルではなく、ひとつの根性のある男として紹介してくれているので、本人もそれに応えて成長すること。